

## 12

## ゲーテと医療(第5報)

— ヴィルヘルムマイスターの修業・遍歴時代に宿るゲーテの医師像 —

鈴木 重統

北海道大学医師会／北海道大学医療技術短期大学部名誉教授

## はじめに

昨年生誕270年を迎えたゲーテは、周知のごとく出生時の重症仮死をはじめとして、落馬による重傷、心臓炎などさまざまな疾患を経験し、自らもローデル教授の指導のもとイェーナ大学で顎間骨の発見によって医学博士を授与されるなどの業績をあげていることから、彼がその作品のなかで第一にどのような医師をつくりたかったか、第二には彼の医師に対する考え方などに焦点をあてて考察を加えたい。

## 1 ヴィルヘルム・マイスターの修業時代 — 生を思えを強調 —

(1) ゲーテがイタリア旅行後に完成した「ヴィルヘルムマイスターの修業時代」の第8巻第5章の「過去の広間」における叔父の碑銘「生きることを思え」(Gedenke zu leben)をモットーとするものが多くこれが彼の考え方の基本である。しかし「生を思え」という言葉とはうらはらに現世から姿を消して逝く人々もいる。若い貴族に捨てられる女優アウレーリエ、主人公の子を産んで世を去る初恋の女性マリアーネなどである。(2) 第4巻第5章においてヴィルヘルムは旅役者の仲間とともに盗賊に襲われ銃弾を受けて負傷する。負傷したヴィルヘルムに包帯を施す外科医について「この外科医に教養はなかったが、相当に器用で、技術は熟練しており人々はかれの救護を喜んでいる。」と述べ、尊敬の眼差しをもって外科医とその往診袍を眺めている。

## 2 ヴィルヘルムマイスターの遍歴時代 — 外科医を称賛し、解剖学の重要性を説く —

(1) 第1巻第6章でフェリックスが伯父の山番小屋からの帰り道に落馬して怪我をする場面がある。同行していた外科医がすぐ頭の傷の手当をするが、このときヴィルヘルムは近寄ることを許されないのでこの場面が将来の外科医のヴィルヘルムを示唆していたかは不明である。「そうよ。内科医は減多に要らないけれど、外科医はいつでも要るのね。」というヘルジーリエの言葉をヴィルヘルムは聴いている。当時の日常生活に如何重要であるかを示唆している。事実、ゲーテはその戯曲「扇動された人々」のなかで「奇跡なしに癒し、ことばを用いずに奇跡を行うという、あらゆる仕事のなかで最も崇高な仕事」と外科医を称賛している。(2) ゲーテはその著書「イタリア紀行」においてローマの病院を訪れその標本のなかに美しい筋肉体が準備されていることに感嘆して造形的解剖学者の出現も望んだこともあったが、根本的には医学教育における解剖学的知識の重要性を説いている。それは、医師になったヴィルヘルムが友人のフリードリッヒに述べた言葉からも明らかである。

「医師というものは、薬を用いるにせよ、手で事にあたるにせよ、どんな医師でも、人体の内外の各部に関するこのうえない精密な知識がなければ何の意味もない。そして、学校でその簡単な知識を習得して、このはかり知れない有機体の多様きわまりない各部の形態、位置、連関を表面的に理解しただけでは到底不十分なんだ。この知識、この観察を繰り返して自己を鍛錬することと真剣に取り組む医者なら、この生きた奇蹟の連関を絶えず目と精神のまえに新たにしておこうと、あらゆる機会を毎日求めるはずだ。」

## 要約

修業時代、遍歴時代を通してヴィルヘルムは様々な生活経験を経て活動的な人間へと形成される。

ゲーテは結語として「厳格に芸術に従事するものは、生涯をそれに捧げねばならない。これまでに人はそれをHand Werkerと名付けた。これに従事するものは手をもって働かなければならない。手、手がそれを試すためには独自の生命が手を魂づけねばならない。手はひとつの独立した自然でなければならず、彼女(手はドイツ語で女性名詞—die Hand)の思想、彼女自身の意思をもたねばならない。」としているが、これがヴィルヘルムに望んだ医師像と思われる。